県央支部版
ひゃくまん穀通信
第1号
生産者部会県央支部
平成31年4月発行

1 ひゃくまん穀は土づくりから

「ひゃくまん穀」の多収という特性を十分発揮させるためには、土づくりは必須です。
昨年の収穫後に次の①～④の土づくりを行いましたか？

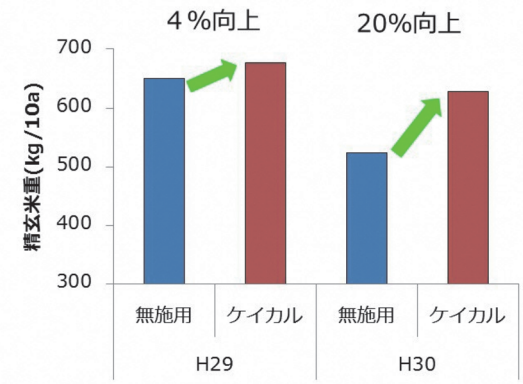
① 作付予定のほ場の土壌分析を実施し、土壌状態を把握している。
② 作付予定のほ場は10月末までに秋耕し、稲ワラは全量すき込んだ。
③ 秋耕しは作土層が15cm以上になるよう深耕した。
④ 土壌分析結果に基づき、土壌改良資材またはたい肥の散布を行った。

もし、まだ土づくりを行っていない場合は、耕起前に次の対策を行ってください。
⑤ 土壌改良資材（ケイカル　60kg/10a）を施用する。
⑥ 作土層が15cm以上確保できるよう荒耕起を行う。

パワフル大地
（バランス型）

ようりん
（リン酸型）

ケイカル
（ケイ酸型）

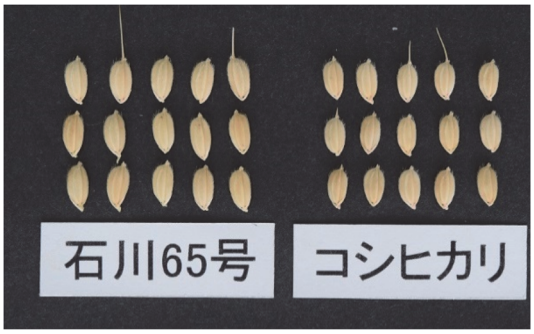


ケイ酸不足のほ場ではケイカル
施用で増収効果を確認

2 播種量はコシヒカリの1．2倍

「ひゃくまん穀」は大粒が特徴の品種です。千粒重（玄米1,000粒の重さ）もコシヒカリ22．5gに対し、26.3gと約1．2倍。播種量の目安はコシヒカリの2割増

播種量の目安
コシヒカリ乾籾１２０g/育苗箱
の場合
ひゃくまん穀乾籾１４５g/育苗箱



3 5月連休中田植えのための計画的は種

（1） 登熟に必要な気温と日照を確保する

ひゃくまん穀は出穂時期が遅くなると、登熟に必要な気温と日照が得られず、登熟不良により収量や品質が低下します。
そのため、8月10日までに出穂させることが必要になります。

１６MJ/m²以上必要

出穂期	出穂後30日間日射量(MJ/m²)			
	小松市	金沢市	羽咋市	輪島市
8月5日	18.0	17.6	17.5	17.1
8月10日	17.2	16.8	16.7	16.4
8月15日	16.4	16.0	15.9	15.5
8月20日	15.6	15.1	15.0	14.7

８月１０日出穂で日射量が確保される

5月連休中に田植えを行う

（2） 5月連休中に元気な「稚苗」を植える

ひゃくまん穀は穂数（茎数）が取れにくい品種特性があります。
遅く（6月20日以降）に分げつした茎は、穂になりません。
穂数不足は減収します。

6月20日までに茎（穂）を確保するため、田植え後の活着と初期生育を良くする。

元気な「稚苗（葉齢2．5L）」を5月連休中に田植えする

5月連休中に元気な「稚苗（葉齢2．5L）」となるように、
種播きの日程を調整する
（育苗期間は1か月以内）

田植適期の稚苗

播種	田植	育苗日数
4月10日	5月1日	21
4月13日	5月3日	20
4月18日	5月6日	18

4 育苗中のハウス温度に注意する

育苗の開始が10日間遅くなると、外気の平均気温は約2℃高くなるので、ヤケ苗や徒長苗にならないようハウスの温度管理、換気に注意する。

	平均気温（平年値）
4月　1日	9.3℃
4月１０日	11.5℃

３月５日県央支部栽培講習会　たくさんのご参加ありがとうございました。今年も「ひゃくまん穀通信」を発行します。生産者・消費者ともに満足するひゃくまん穀をつくりましょう。